

残雪 『蒼老的浮雲』 (エッセイ)

藤重典子

残雪を読んで念頭に浮かんだのは『虫愛づる姫君』の物語である。

屈つぽく反抗心旺盛な姫君は、可愛らしく上品に育ててほしいという周囲の期待を裏切つて毛虫やら蠅螂やらカタツムリやらを集めてかわいがっている。それは単なる「異常嗜好」とも呼ぶ人もいるが、姫の行為にはそれなりの論理がある。

人間とは誠実さを持ちつつ、物事の本質を追求してこそ、その心は趣深いものである(人は、実あり、本地尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ)。人はすべて、装いつくろうことがあるのはよくないことである(人はすべて、つくろふ所あるはわろし)。ありふれたものは、つまらない(例のやうなるは侘し)。人は悟りきつてしまえば、何でも恥づかしいことなどはない。夢や幻のような世の中に、いったい誰が生きながらえてこれは悪いことだ、善いことだと様々な出来事を見たり思ったりできるだろうか(思ひとけば、物なむ恥づかしからぬ。人は夢幻のやうなる世に、誰かとまりて、悪しきことをも見、善きをもおもふべき)。

この平安末期の一少女の論理は何と作家のそれと似ているのだろう。本質(真実)の探求、人生の道を自分で選んで異色に染め、そして選択に伴う周囲の毀誉褒貶の類をカラリと切り捨てられる小気味良さ、社会通念への懷疑。遊びの精神もある。そしてまた当時、羅城門にひしめき合っていた死体を思い起こせば別の風景も見えてくるかも知れない。

さて中国の作家は姫君のように囲い込まれ、一つの態度や生き方が期待されている。権力への批判・監視という民衆の利益よりも、権力の維持に奉仕せよという支配者の利益のほうが強いインパクトがかかってくるのである。これに対し劉賓雁のようにその枠を守りながら、権力悪と悪戦苦闘する生き方もあるし、いわゆる「反体制派」のようにそれに直接ぶつかる方法もあるが、姫君のように「ひねり」をきかせて虫を愛づるという方法もある。それはもちろん逃避型抵抗であるが、知ったかぶりや正統派ぶった説教、取り澄ました顔が権威として現われる時に野卑、愚昧、猥雑は強力な武器たりうるのである。そして残雪は世間とはねじれた位置に身を置き、自由な文学空間を守ろうとする。

一般の目に映る残雪の作品は「筋は煩瑣で互いに関連はなく、論理的にたどりよのない言葉が一つ一つ際限なく飛び出し、人物は多くが適切な位置を持たず、

彼らは互いに依存しながら生きていくせに、お互いにのぞき窺い、妨害し、ある強烈な不安全感に満ちている」夢でうなされるような世界である（『残雪的世界』『文学報』87.1.4）。中国において人生のためになる、ということが文学の価値づけのメルクマールであった時期は長い。そのような文学で精神を灌養した世代にとっては残雪の文学は別世界からの価値観の揺さぶりである。そして私は、残雪は新しい文学と呼べると思う。公式に沿った作品を書くことが期待された三十年間に作家たちが拾い上げることのなかった、公約数にしきれない人間精神のある部分が極限にまで追究されているという意味で。

残雪が自己の文学について語ったことをまとめると、外界の自分に対する種々の評価、現実の枠にとらわれず、自己の想念を描いていく。それは見えない隠されたもの、言語の背後にあるものを描くことである。その目的は自己を探索することであり、それは最も真実に生きることでもある。それではなぜ発表するのか、それは私が虚栄心が強いからだ、と彼女は言う。別の場で彼女は言う、心が通じあう人を求めている、相互理解は絶対的なものではないけれど（『残雪的世界』前掲・『作品与争鳴』88-6）。

虚栄心をことさら強調することから、残雪のシャイなマゾヒズム（人間愛を語るくらいなら、悪者にされた方が良いのだ）や露悪趣味が顔を見せている。自分に外国の友人ができたと言えれば外国崇拜思想のせいだと思っつけ加え、小学校を卒業しただけの自分の学歴のなさや、夫と仕立屋をしていることもひけらかす。これは「外国崇拜」を抑圧する政府、教養を鼻にかけながら謙虚ぶるインテリ、個人営業への差別などに対する「残雪式抵抗」というべきであろう。私はそこに彼女の茶目っ気と反骨精神さえ感じ取るが、反発を感じる人もいるだろう。そしてそれは自分の文学への絶対的自信に支えられてこそその発言と言うべきだろう。それにしても文学活動の動機をすべて自己の主体性だけで支える構造は強い。どう評価されようと私は私の文学を書く、というのだから。

また彼女は強い理性で自分を抑制し非理性的状態で創作すると述べている。このような発言をする場合「理性」の定義をしてほしいとも思う。もしもその非理性が単に天井から足が生えるという類のものであったら、この「理性」は「常識」という言葉で置き換えることもできるからだ（また、天井から生える足を子供の目から見た首吊り死体と読むことも可能である）。中国で「理性」を扱うとどうしても儒教が混じる。例えば劉曉波も次のように述べている。

「私の使用している理性とは、主に人の生命エネルギーに対する束縛、抑圧、異化を指しており、それはまた中国伝統文化に於ける道徳理性と認識意義上の理性認識である。この述語の特定の内容（内涵）を明確にするために、中西の比較

を進める必要がある。理性、感性、非理性などの哲学述語は中国文化固有のものではなく、西方哲学から借用したものである。この述語がわが国の文化体系に入ると、その意味は西方とは完全に異なったものとなる。」（「再論新時期文学面臨危機」『百家』88-1）若干の作家は束縛に「反理性」を対置するのだが、この「反理性」に対し、教条派はマルクス主義の観念論批判と中国独自の「束縛、抑圧、異化」を混ぜて応じることになる。

ともかく残雪についていえば、理知的な人間がわざとグロテスクな形式を野放図にとった結果、その表現には抑制や禁欲が不足しており、それゆえ王蒙が指摘するように人を魅了するような見事な描写と読み続けるに耐えない煩わしさが混在していると思う（「読<天堂里的対話>」『文芸報』1988.10.1）。しかしそれが、西洋文学をかじった作家の才気走った物まね（としか私には見えない作品がある）に墮していない理由は、数奇な体験に裏打ちされているからだろう。彼女の経歴については近藤直子氏が詳しい紹介をされているので参照されたい（『蒼老たる浮雲』河出書房新社1989.7）。

残雪の作品に関する評論は多くないようであるが、おおむね好意的と言える。それは多くの無理解と排除の土壌の中で少数の優れた評論家が好意的批評をした、ことを意味しているのかもしれないが、先に挙げた王蒙も残雪の文章表現の美しさに紙幅を割き、文学界が視野を広げることを訴えている。また、何人かの評論家は残雪の一見荒唐無稽な表現に文革時期の現実の確かな反映を見て取ってもいる。

「……残雪の感受性は確かに十年の動乱の時期にあった狂気の現実の記憶の痕跡から来たものである。彼女は苦痛を人に嘔吐を催すやりかたで明らかに示し、同時に彼女は童話のようにこの不吉な夢のふちに泳いで行き、ある超現実のロマンチックな世界をはるかに見渡すのである。」（「評一種陌生的小説意態」楊小浜『上海文学』88-1）

「私はこの“追いつめられたけもの（困獣）”の意識をよく知っている！二十年前、私は“犬ころ”であったためにやむなく家に隠れ、紅衛兵たちがどうやって門に押し入り私の父母を“つるしあげ”しようかと大声で相談しているのを恐れおののきながら聞いていた。あのような心の休まることのない恐怖の光景は、今思いだしても感情がひどく高ぶるものだ。しかしこの類の感受は余りにも重くのしかかってくるので、一般の人は深く考えようとしなない。ことはもう過ぎ去ってしまったのだから、いっそう忘れ去ろうと努力するのである。あの希望の全くない恐怖の中に再び浸りたい人は誰一人いないだろう。」（「疲憊の心霊——從張辛欣、劉索拉和残雪的小説談起」王曉明『上海文学』88-5）

「まぎれもなく、現在残雪の小説を“非社会化、非歴史化、非現実化、非理性

化”と見なして拒絶する人がいる。しかし私が言いたいのは、彼女の心理構造の“無意識”の構成の中に、社会の全歴史の沈積した影響をうかがうことができるからには、彼女の“非理性化”とは単に彼女の“無意識”な心理形式にすぎないことだ。」（「小説創作的新走向」胡宗健『鐘山』87-6）

ここで問題にされているのはすべて忘却と記憶に関わることである。いまわしい記憶を故意に忘却し、それによって精神の自由を得ようとする健全で自覚的な記憶喪失が一般にあり、その傾向に対して残雪は暴力装置の中で抑圧されてきた者たちの記憶を執拗に喚起する。それは理性・常識・事実という形をとらないだけに異様に膨らんだイメージとなり、潜在意識の分野に働きかけて冷酒のように身体の芯から効いてくる訴えなのだ。

一方近藤直子氏は“「中国」という歴史物語”の破壊に残雪文学の価値を見いだしている。しかし「彼女の小説には、背景と呼びうるものがまったくない。歴史もなく、時代もなく、社会もない。」という言葉はわかりにくいものだ。別の場所で彼女は「人間が人間を食う社会」という言葉を使っているではないか。またほんの二、三ページ前で「彼女の小説を読み解いていく上で、ぬきさしならない意味をもっている」として残雪の子供時代の体験や家族関係を綴ることは、つまり残雪の育った時代の反映として作品を読むことが出来るということの間接的表明ともとれる。「彼女の小説においても、やはり、歴史的な時間の流れとしての中国を読みとることは、不可能である」という言葉なども、私にはそのままでは受け入れがたいものである。実際中国の評論家たちは読み取っていると私は思うし、外面的事実を越える膨らみを持つことこそが文学の価値であろうから。なおかつその文学によって「歴史物語」を排除するよりも豊かにすること、中国をより究極の姿で読みとる方が私にとっては興味深いのである。ともかく、残雪は体験を共有する人々の中に多くの共感者を持つたたかな売れっ子作家でもあり、彼女に場を与え続けているのも「歴史的な時間の流れとしての中国」に他ならない。傷だらけの自由かもしれないが、自由な作家と自由な読者が中国に誕生しているのである。

さて、私が扱いたいのは『蒼老的浮雲』である。内容豊かな（あるいはわけのわからない）作品ほど多面的な読みができるだろう。そして正当な読みのバラエティを統合すれば作者の精神の全貌が見えてくるものだろう。この作品に関しては近藤直子氏が『蒼老たる浮雲』のあとがきで「賊」をキーワードとして一つの読みを提示しておられる。残雪の作品について中国では「悪夢」「心理」「潜在意識」「精神分析」などのタームで大ざっぱにコメントされることもあるが、分量のある具体的な作品分析は私の怠慢のせいか、近藤直子氏のものを除いては見

あたらない。私はできればこれを文革末期を舞台にした恋愛小説として読んでみたいと思う。

虚汝華と更善無、この一対の女と男は二人合わせて「虚無」の名を持つ。それはニヒリズムの虚無でもあるが、それ以上に道家が理想とする虚無に近いだろう。二人が見聞きするものは他の人には見ようとしても見えず、聞こうとしても聞こえない。二人の中でも虚汝華は無為を最高の道徳とする道家思想の体現者と言えるであろう。

乱暴な独断で年代は文革末期、虚汝華も更善無も文革で迫害を受けた側の人物である、としてみる。理由はこの小説の所々に「八年」という数字がしばしば出てくるからだ。虚汝華が夫と結婚し、ここに移り住むようになったのは八年前である（『天堂里的対話』作家出版社1988.3、183頁。以下ページ数のみ記す）。一方更善無は十年前に結婚した。彼は学院（単科大学）卒業で地質調査隊に加わるほどの職能があった（188頁）。その調査隊がまもなく解散し、彼が無能力者として扱われていることに私は文革を感じ取る。彼の将来を囑望して娘を嫁がせた舅、姑は賤民的存在になった婿に「騙された」と感じたのも無理はない。姑はまもなく死んだが、その原因は彼に腹を立てたせいだという（126頁）。また舅は更善無の家の什器を持ち帰ったり家の塀を掘ったりと奇矯な行動をするが、妻に言わせると舅が半分狂っているのは更善無が家のものを騙したせいであり（211頁）、自分が臭い放屁をするのも彼の才能の限界を知ったせいだという（212頁）。また八年前、虚汝華と更善無が初めて会った時、彼はもうこのような状況であった（188頁）から、八年以上前に彼の人生を変えるような事件があったのである。虚汝華は「右派」の娘ではないかと私は推測する。父はエンジニアであったが、おろおろと気に病むたちの妻をあっさりと放り出し、煙草の露店を出している老婆と同棲を始める。虚汝華は小さい頃は聡明で短距離の選手さえやるほどの活発さを持っており、母は娘の将来を楽しみにしていたが、成長するにつれて投げやりになり、菓子屋の売子になったのをひどく憎んでいる（202/221頁）。その母にとってもこの八年は大きな意味を持っている。

「八年来、彼女はずっとこの家で余命をつないできたが、不思議なことに一向死ななかつた」（238頁）

「考えてもみて、八年の苦痛を！惨めな晩年を！……」（239頁）

虚汝華の夫の老況は学校教師で白痴的な人の良さを感じさせるマザーコンプレックス気味の男性である。同時に妻を殺害しようと思ったり（236頁）、妻の父のところに金をたかきに行ったりするなど（244頁）、時には凶暴で貪欲な姿を見せることもある。その夫も八年間妻の狂気に振り回されたと言う。

「考えてもみろ、八年来、彼女はずっと家の中でコオロギとムカデを飼ってきたんだぞ、身の毛がよだつじゃないか。……この毒虫と丸々八年も闘って、すんでのところで精神錯乱になりそうだった。八年の青春だぞ！人生で一番すばらしい時期をだぞ！」（253頁）

また、悪夢にうなされる老況に母親が告げる言葉「心の中で語録をいくつか唱えなさい」（237頁）も文革を連想させるものの、これを「文革の八年」とするのは今一つ無理があるのは承知である。それを確定しうる言葉はないからだ。しかし内的世界に逃避することはできるが、そもそも内的世界を形成したものが外界なのだから、記憶喪失にかからないかぎり、外界はどこまでもついてくるものである。だから四歳で「極右」の娘となった残雪の書くものはこう読むこともできる、と思う。更に、想念の迷路を、自分が迷ったからといって「この迷路には出口はないのだ」と断定する権利は誰にもないし、「私には出られなかった」とも言いたくなければ、壁を一つくらいブチ抜いてもいいのではないかと思う。

さて、虚汝華と更善無は八年間隣同士であったものの、二人の接近のきっかけとなったのは彼が梶の木の落花を埋めていたのを彼女が見たせいである。この社会で人々はお互いに監視しあっているが、その中でも更善夢には被害妄想めいた視線恐怖がある。見られてしまったことへのこだわりが相手への関心になり、見た方も見たことの印象の強さと相手の過剰な反応から相手を意識するようになり、二人は急速にひかれあっていくのである。無意識に耳をすます二人には壁一枚隔てたお互いの声が聞こえるようになり、隣家の全く無関係な会話や独り言がコミュニケーションとしての意味を持ち始めるのである。壁越しに相手の寝息を感じ、お互いに同床異夢ならぬ「異床同夢」であることを知ったら「同床同夢」へと向かうのは事の成りゆきというべきであろう。

夫の老況に去られて一人暮らす彼女のところに彼はやってくる。彼女は彼と親密なささやきを交わしたいと願う。彼女は部屋に生えるお化けキノコ、天井から生える足などについて語る。それは聞き手のことは何も考えず直接伝える真実、コミュニケーションの社会的規範を無視した主張であろう。独白による対話というのは残雪がよく使う手法である。しかし虚汝華の語ることは彼は何でも知っている。それは彼自身もまた自己の内部で他者に伝えるのが余りにも困難であるがゆえに内に閉ざしている「自分にとっての真実」を保ってきたせいである。彼女は語りつつ彼の背中に手を置き、背中を撫で、萎びた腹に彼の頭を押し付け、その手を引いて蚊帳に入っていく。（203頁）

また一カ所ではこういう描写がある。

「ベッドの上で、彼の肋骨が彼女をこすっていた。短い、耐えがたい一瞬であった。」(209頁)

しかし何と殺伐とした性であろう。萎びた身体的女と貧相に痩せた男の官能さえ奪われたようなセックスなのである。甘えた声を出したとたんその自分にぞっとし、部屋や身体の汚れに恥入りながらの性はついに二人の距離を縮めることはできない。結局二人の愛は泡のようにあえなく消えてしまう運命にある。彼女があとで彼との情事を回想しようとしても、いつもバラバラで、あるかないかの断片にすぎないのである。「もしかしたら、完全な勘違いではなかったか？最初は彼女も確かに欲望のようなものがあつた。しかし最後に彼とあのソラマメを食べ、彼が地質調査隊のことを語ってから、彼女は欲望があとかたもなく消えてしまうのを感じた」(220頁)

二人がすれちがった理由は彼のアンビヴァレンス、もしくは二人の環境への処し方への違いによるものだろう。彼女は全く自堕落に気ままに無為に暮らし、そして自分の夢や見えるものを勝手に語る。その彼女の世界を彼は理解できるし、強く心引かれはするが、そこに入り込んでしまうことに一抹の不安を覚える。彼は社会の中での自分の評価を気にし、自分がまっとうな人間に変わりたいとも願っているからだ。最初の情事でも「私たちは双子の姉妹みたいね、話をすれば大差ないし」と言い、しきりと自己の世界に誘う彼女に対し、彼は相づちを打ちながらも、人から監視されることへの不安を不協和音のように語る。そして彼はその後現実生活に苦しみながらも彼女との縁を断ち切ろうと努力し、一方彼女はそんな彼を拒否し始めるのである。

「きのう隣の女とベッドで寝ているとき、彼は自分が一匹の南京虫をひねりつぶしたのに気づいた。彼は血をベッドの縁になすりつけながら、このベッドで寝るのはもうよそうと心に決めた。」

彼は職場でも家でも街を歩いても人から馬鹿にされ、笑いものにされる。職場でも仕事をさせてもらえず、事務室の窓際でぼんやりと物思いにふけて立っているしかない(203/223頁)。その彼が、職場に出てきたネズミを追うみんなを見て、「彼らの一員になったような気がして」追っていくようになる(226頁)。以前アゲハ蝶が職場に入ってきた時に「心の中の人に言えない秘密を押し隠すために」みんなと同じ行動をとろうとした彼とは変わっている(195頁)。そして彼はついに意を決して別の人間になろうと、勇気をふるって所長の家に行き、告げる。「実は僕、厳粛に考えているのです。別の人間に生まれ変わろうと……」

(228頁)生まれ変わるとは、彼の妻が彼を罵って言う言葉「心の中に人に見せられないような事を隠している」(229頁)状況から、大衆と一致した、秘密のない精神状況を作ること、夢を見ず、自分の精神を虚汝華から断ち切ることであ

る。

虚汝華はそんな彼の心情を敏感に感じ取り、二人の間に生き方をめぐる対話がなされることになる。

泣き声で「僕は本当にもう生きていけないよ」と甘える彼を彼女は下手な芝居はやめろと突き放した。彼は既に生き方を選んでいるくせに、彼女を捨てているくせに、迷っているふりをして彼女の同情をかすめ取ろうとするからだ。対話には彼の弱さと苦悩、彼女の毅然とした厳しさ、それと優しさが見て取れるだろう。

「あなたはずっと変わろうと思ってきたのね。もしかしたら成功するかもしれないわ。あなたはずっと努力してきたんだし。どんなに大変なことか、想像もつかないけど……」

彼は怒りに燃えて語る。

「みんなは、何を話し、何をすればいいのか、ちゃんと規定がある。だけど僕は、何者でもないし、変わろうとしても似つかないものになるんだ。心労を尽くして他人の歩き方を真似しようと、一日事務室の窓際で物思いにふけているふりをして、立ちっぱなしで足が棒になってもね。実際僕もこう規定されたのかもしれない、このような何者でもない人物、とね。」

彼女は答える。

「私？ああ、私はいつもあなたの事を思い出せないのよ。私の考えでは、あなたは影のようなもので、確かに何者でもないわ。実際私だってそうだわ。でも私はこのことで苦悩したりし、変わろうとも思わないわ。わたしはもう干からびてしまったの、前にも言ったでしょう、身体に芦がびっしりと生えているのよ。……私たちのような人間の中には、変わろうとして、成功して、普通の人になる人もいるわ。だけど成功できなくて、それなのに何者でもないということに安住できなくて、自分に一つの明確な規定を与えようと無駄に一生もがいている人々もいるわ。あなたも成功できないでしょうね、骨は重そうだし、関節炎にかかっているから、人前で身体を回すのだって困難だわ。でも見て、私を。胡瓜の漬物を食べて、泰然自若と暮らしてるわ。」（223頁）

彼女が彼に自分の生き方を語る部分がもう一つある。

「私を見てよ、こんなに落ちついているわ。私は外界の刺激は受けないのよ。私の悩みは別のことよ。身体が変になっているの……」（249頁）

この世界には「何者でもない」「私たちのような人間」が他にもいる。彼はその中の一人として普通の人間に同化し、成り上がろうとする。しかし彼にとっての悲劇は自分がなろうとするものを選べないことだ。興奮してネズミを追う愚かしい世界に同化するか、何者でもないものに留まるかという残酷な選択肢しかない

いのである。一方彼女はそもそもそのような選択自身を認めない。外界に対する彼女の意見には恐ろしく醒めきった認識を見て取れるだろう。それは抵抗としての拒否であり、無関心ではない。その生き方はたとえ滅亡に至る道であろうと高貴な威厳を放つであろう。哀れで卑屈な存在に仕立て上げられたはずの人間が超然としていると、周囲は苛立ち嫉妬する。彼女の部屋の回りを徘徊する人々は、彼女の威厳を憎みつつ惹かれ続けてもいるだろう。一方外界の影響を受けないとは、残雪自身が自分の創作について語ったことばであり、外界をいったん切り放し、精神世界での創造に向かう虚汝華は残雪の投影でもあろう。また、双子のように似ていてお互いに引かれつつ葛藤する虚汝華と更善無は一人の人間の分裂する精神、つまりかつて普通の人間になりたいと苦悩し、同時に外界を拒否した残雪の精神でもあるかもしれない。ここで想起するのは阿Qである。階級脱落者＝賤民である阿Qに人々はかくも残酷であった。人々は自らの利益と何ら関わりのない阿Qの小さなプライドでも、いったん表明したら最後、徹底的に破壊しなければ気がすまないのである。人々が実際に行っているのは小さな意地悪にすぎない。しかしそれは蛍火のようにほのかなプライドをたやすく踏みにじってしまうし、人々はそういう結果に至ることを知った上で行っているのである。この攻撃から自分を守る最良の手段は自己の世界に閉じ籠ることであろう。

物語の結末は滅亡である。梶の木は雷で倒れ、虚汝華はベッドに横たわり壁を通してあらゆるものを見ている。更善無は病気にかかった。虚汝華の父は失明して中庭をぐるぐる回り、母の死を風のにおいでかいだ彼女は自分の死を予感する。

残雪の作品には数多くの象徴が使われている。自分の持つイメージで読んでもいいし、『イメージ・シンボル事典』（アド・ト・フリース、大修館書店1984）などを片手に、人間がその象徴にこめる意味のバラエティを確認しながら読むこともできる。たとえば、スズメに愛情、好色、淫乱や孤独の意をこめることができ、夾竹桃について「この花の蜜は狂気を生む」とあると何となく読みの世界が広がると思う（東西文化の違いも考慮に入れておくべきであろうが、画一化された現代の管理社会に住む人間である自分のイメージの貧困を補うこともできよう）。残雪が愛読するカフカの『変身』にしても虫に変身した主人公のグロテスクは、小市民的生活の執拗な描写の中に投げ込まれて、初めて生命力を持つのであるが、残雪はとにかく象徴を濫用する。（残雪とカフカは怪奇や夢への偏愛という共通点に加えて、一方は右派の娘として、一方はユダヤ人として自分には責任のない理由で賤民とされ、一般社会の排除と悪意に苦しんだという、体験における共通点を持つように思う）。それは「理性を抑制しなければ理性的なものが

できてしまう」という彼女の現実追い出しのための道具であり、また中国の「リアリズム」文学に対する確信犯的叛逆の武器なのである（そして「リアリズム」の形式を取った文学が全くの空想物語であったという事実の逆、つまり空想物語の形式を取った文学がリアリズムであることも可能である）。私は残雪の象徴の雑多な感じに駄菓子屋を連想する。様々なものが並んでいるように見えるけど、材料は砂糖と小麦粉と油など数種類のものであるから、多様でありながらワンパターンだと思う。しかしながら一方、様々な並べられたシンボルの形を見るのは楽しいことでもある。虫が使われるのは虫の持つ生理的にぞっとする感じと、（虫にもよるし人によっても感じ方が違うのだろうが）、ごく僅かであるが小さく可憐ではない感じが、彼女の表現したいものの雰囲気をかもし出すのだろう。彼女を「中国の虫愛づる姫君」と呼びたい気がする。

意味をこめられた象徴で大きな比重を占めるのが冒頭の梶の木と、虚汝華と更善無の夢に出てくる亀、それと母の部屋の石臼などである。冒頭の梶の木の描写は見事だと思う。人を威圧するような大木に真っ白に咲き誇り、存在を誇張するように重たく落ちて、において人の気を狂わせるような花を咲かせ、それが倒れると人々の滅亡が加速度的に滑り出す木は、そのまま作品世界を象徴する。亀は私にはよくわからない。エンデの『モモ』に出てくるカシオペアはのろのろしていながら時間を超越できる人類救済の使者であるが、残雪の描く、目をむき出し泥濘の中を休みなくこちらに向かう亀は敢えて意味を読み込むと不吉な破滅の使者であろうか。（参考に近藤氏の解説は“その「亀」は、三次元の空間にもうひとつの次元として侵入し、「死」の役者たちに背後から迫ることによって、その舞台の光景全体を救いがたく愚劣で無意味な文字どおりの茶番劇と化している”である。関係する原文は“两个人都在夢中看見一只暴眼珠的烏龜向他們的房子爬来”185頁）また石臼は死の床にある虚汝華の母の部屋で、虚ろで乾いた音をたて、最後にはその身体を砕く。思うに石臼の回転にはいつまでも止むことのない輪廻のような意味をこめることができる。母のそのまた母の骨壺がベッドの下にある。虚汝華も母も夫に去られ、孤独の部屋に湧く動物と闘い生きているが、その耐えがたい繰り返しと重さ、また娘を迫害した罰が込められていると読んでおきたい。

このような描写は作品の中にしっかりと位置づけられたものではなく、途中で腰砕けになったり、取ってつけられたりしたようなものであり、それは次の文がどこにあるかも考えないで書くという残雪のアナーキーな創作方法に起因するものである。これについて、中国の批評にある次の指摘に私は共感する。

「残雪はひどく神経質な人で、悪夢（原文＝夢魘）が身にまといつき、このように発散しなければすまないと言うのだろうか？あるいは彼女の視覚思惟は余

りに発達していて、筆を執れば本能的に原始的な感覚印象を書きたくなり、曲折した物語などを編む煩わしさに耐えられないのだろうか？そうでなければ、きっぱり言うと、彼女は何か人を騙して（瞞哄）いるのではないだろうか？私はこれらの原因は皆あり得ると思う。しかし、更に基本的な原因がある。それは残雪の個人性を堅持しようとする強烈な願望（意願）である。」（「疲憊的心灵」）

残雪の書く異様なものは、真実でもあり、こけおどしでもあり得ると私は思う。それは彼女が熱中して作った部分と、「故意に新しいものを作ろうとする」時の「故意」を読者が感じ取るせいであろう。しかし、私があまりさかしらを言いたくない気も一方ではするのは、「物語ることもできないほど、多くのことを経験した人の真実の、底知れぬ憂鬱さはその人にとって真実を言っているのかもしれないが、ほかの人々にとっては恐ろしいことにすぎない」（『ラーヘル・ファルンハーゲン』アンナ・ハレント、未来社、1985）ということの可能性、自分の精神の平板さへの疑いである。彼女は個人の力では容易に抜け出せない悲劇や不幸の彼方にある、おぞましくもあり陶酔もさせる幻覚や幻聴の世界からこの世界を見据えている。それは彼女が絶望的現実には埋もれた少女時代をどのように生きたかという証拠でもあろう。それはある時は意味が崩壊する寸前、奇矯なる不毛に転化する淵の間際まで行われた探索である。そしてより本質的なところに矜持と呼べるような強い自我と批判精神が宿っている。このグロテスクも語られることによって、共有されるテーマとなったわけである。マンネリが指摘されることもある最近の残雪であるが、この魅力ある特異な才能が作品を産み続けることを愛読者として願う。

人民日报 1989.11.15

新华社北京
11月14日电
中国作家协会主席团
近日作出决议，
取消刘宾雁、
苏晓康的中国作
家协会会籍。

中国作家协会
主席团的决议
说，鉴于刘宾雁、
苏晓康在国内外
进行反政府活动，
发起、成立反动
组织“民主中国
阵线”，现依据
《中国作家协会
章程》第14条规

定，取消刘宾雁、苏晓康的中国作家协会会籍，刘宾雁的中国作家协会副主席、主席团委员、理事职务也随之撤销。

取消刘宾雁苏晓康会籍 中国作家协会主席团决定